

第23回OMS戯曲賞選考経過 -2017年12月19日-

九鬼葉子

「二転三転、四転五転、七転八倒の末、山崎彬さんが大外から逆襲」。授賞式後の公開選評会冒頭、司会の小堀純氏の語った言葉が、すべてを象徴していた。午後1時5分から6時1分までの4時間56分に及ぶ激論だったが、5時59分、つまり終了の2分前まで、誰が受賞するのか、行方の全く読めない、過去最高にスリリングな選考会であった。

その詳細をレポートする。論議の過程で、一旦、授賞対象外となった作品も、後半で再び語られることも多かった（最後までお読み逃しなきよう…）。

関西の新しい才能の発掘と、中堅劇作家にエールを送ることを目的に、大阪ガス株式会社主催、大阪ガスビジネスクリエイティブ株式会社の運営で開催されているOMS戯曲賞。扇町ミュージアムスクエアが閉館して14年になるが、戯曲賞は継続され、来年は25回となる。関西の劇作家の目標として、また新しい才能との出会いの場として定着している。

今回の応募作は53作。うち23作が初応募。最終選考に残った8人の内、4人が過去の佳作受賞者、二人が初登場という、実力派と新人が混淆する布陣だ。

選考会では、まず投票が行われた。大賞に○、佳作に△。複数付けてもよいことになった。それ以外は×を付けるのだが、渡辺えり氏から「×は付けたくない。自分が読み込めなかったのか？という意味を込めて？マークを付けたい」という希望が出され、鈴木裕美氏もそれに続いた。

	生田	佐藤	鮎江	鈴木	渡辺
上田	×	○	○	○	○
植松	×	△	○	△	?
岡部	×	×	×	△	?
田中	○	○	△	○	△
植松	×	△	×	?	?
田辺	△	△	×	?	△
村上	○	×	×	△	○
山崎	○	○	△	?	○

上田誠と田中遊が同格でトップ、続いて山崎彬、その次が植松厚太郎と村上慎太郎。○の数では村上が植松より多い。いずれも僅差である。

各作品の所見を述べるところから始まった。時間は1時13分。

岡部はレイ・クーニーの押し入れバージョン

空晴の岡部尚子は、最終選考会3回目の登場。

『ここも誰かの旅先』は、50代の独身男・藤堂がアパートに引っ越した日の話。様々な人が現れる。会社の同僚やその部屋の元・住人、工務店の集金人達、部屋を密かに見詰める男、そして押し入れに隠れる謎の男。すれ違いや勘違いが次々に起こり、大騒動となる。最後には、藤堂の長年に渡る義姉への秘めたる純愛が浮かび上がる。

生田萬氏は「勘違いやすれ違いが巻き起こす喜劇で、楽しいのだが、それ以上でもそれ以下でもない。タイトルの意味がわからない」と語った。佐藤信氏は「?マークになる。3回読んだが、掴めなかった。言葉にこだわって読むと、時間が形成できなかった。人間達の何を見せたいのか、わからなかった」。また鈴江俊郎氏も「読み方がわからなかった。勘違いを書こうとすると、大抵は勘違いするようなことではないことを、追い詰めて勘違いにするが、この作品では、積極的に勘違いに向かっている。人情喜劇の要素があり、家族関係の中で長い年月積み重ねた思いやりを描いているが、僕はそこでは泣けなかった」と語った。

鈴木裕美氏は「レイ・クーニーやジョルジュ・フェドーがお好きなのではないか。ドア物と呼ばれる作品。例えば浮気がばれたくない人がいて、部屋にドアがたくさんある設定の中、誰がどの嘘をついて、ドアが開くのか。しゃがんだら、通路の窓から姿が見えなくなるとか。岡部さんは、見える、見えない、を押し入れでなさろうとしているのがおもしろかった。家族の話は入れずに、誤解のばかばかさだけで最後まで突っ切ると、かっこいいのに。レイ・クーニーを押し入れでやろうとした軽演劇。日本の作家でそれを書こうとした人を知らないので、おやりになればよいと思う」と評価。

渡辺えり氏は「応援している作家だが、この作品は見たことのあるシーンが多い。今までの自分を焼き直す気持ちになっている気がする。人情物としても、どこかで見たことがある。とは言え、かつてマキノノゾミさんがこの賞に最初に応募された時も、同じように厳しいことを言われたが、今、オリジナルな素晴らしい作品を書いておられる。今叩かれても、頑張っって書いてほしい」と語った。それを受け、佐藤氏から「僕は完成されているコメディを待っているので、評価が辛くなる。レイ・クーニーのように仕掛けで見せるなら、基本構造を練ってほしい」と、叱咤激励の言葉があった。

社会に「参加」できない男に、女がどう参戦するかを描く棚瀬

南船北馬の棚瀬美幸は、第15回に『ななし』で佳作を受賞している。最終選考会は4回目の登場。

『これっぽっちの。』は2組のカップルが登場。37歳のサラリーマンと、高齢出産したばかりの40歳の妻。そして38歳で定職もなく、引きこもりがちな男と、28歳の恋人。男達

は少年時代に夢を持っていたが、手に入らなかった。高齢出産した女は、赤ん坊を心配し家から出られない。普通に生きていたら手に入ると思っていたものや、失わないと思っていたものを失っていく人々の、閉塞した会話が描かれる。2組の暮らす部屋は、向かい合わせのマンションの設定。

この作品についても、「？」マークが付いた。渡辺氏は「何を書こうとしたのか、掴めなかった。動機をリアルに読み進めていくのか、暗喩として何か仕組まれているのか、理解できなかった。クローゼットの整理をする記述があるが、捨てようと思ったことの暗喩として書いているのか？ 結果、何が言いたかったのか？ 聞いてみたい」と語り、鈴木氏も「同じ所見。掴めなかった。何を美しいと思ひ、お客様に伝えたいと思って書いておられるのか。こうなりたかった自分について、向かい合せに建つマンションの部屋に住むカップルで、何かを書きたいことはわかるが、どこが美しいのかわからない」と語った。

鈴江氏は「具体的会話と思って読み、それが抽象的に変化する、曖昧な変化の具合が特徴的。曖昧さの向こうに、内心の深い葛藤を、個人的ではなく抽象的なところまで持っていくのを狙った本ではないかと思う。38歳でフリーターの男や、理系だったのに営業職に就いている男の不全感を描いているが、もし乗り越えられない苦勞があり、葛藤を描くなら、その世界についていけるが、苦勞をしておらず、ぬるく感じる。付き合っていく気力をこちらも振り絞れない」と語った。

佐藤氏は評価した。「誠実な戯曲。作家が自覚しているかどうかわからないが、希望で終わっていると僕は思った。新しい共存の形を描いている。互いの部屋の変化に気付くところをもっと押していけば、おもしろい話になる」。

生田氏は「対比的な2組の男女がいて、子育てに参加できない男と、フリーターで社会に参加できない、引きこもりの年長の男がいる。参加できない二人の男に、女はどう参戦すべきか、それを、演劇を通して描こうとした意気込みを感じる。ただ、2組の男女の関係の貧しさが典型的で、味気なさを感じる。例えば、原爆の忌まわしさを描く時、芸術家は、きのこ雲の美しさを描かなければならないと思う」と、評価しつつ指摘した。

田辺の微熱の引力

第14回に『旅行者』で佳作を受賞した田辺剛。最終選考会は8回目の登場となる実力派。下鴨車窓を主宰するが、昨年、地元・京都の若い俳優との出会いと協同作業の場として、fullsizeを結成。第1回公演で上演した『微熱ガーデン』を応募。

地方都市の山麓にある古いアパートが舞台。大学生の結は、学費を稼ぐため、友人の理奈から頼まれた違法の植物栽培を部屋中で行っていた。監視のため、定期的に現れる理奈は、ある組織の男と付き合い、栽培を強要されていた。一方、階下で独居老人が結に心を寄せ、盗撮していた。老人が亡くなり、孫の由人が結の部屋を訪れる。

生田氏は「田辺さんの作品は、『旅行者』から読ませて頂いている。当初、いつでもない

どこかを描き出し、文明の不条理を焙り出していると思ったが、ミニマル志向が、今回ついにここまで来たのか、と、体温と息遣いを感じた。微熱の引力。淡くかすかな力学。観察の目つきは恐ろしいまでに純」と評価した。

佐藤氏も「うまく書けている」と評価しつつ「回想シーンを書いているが、植物が部屋にあると、時間が戻らない。その演劇的構造には疑問を持った。最後に冒頭場面に戻る理由がわからなかった。しゃれたことを演劇でやろうとし過ぎてはいないか？ グリーンのある舞台。違和感のない会話があり、おじいちゃんの使い方があって、説明手段としての回想になっている。でも、否定はしない。△を付けた」と指摘した。

鈴江氏は「僕は作品に入りそこなった。植物を育てている部屋に、大学の演劇部から借りた照明機材が入っていて、大きな動機があるのかと思うが、私には自由がない、という動機だけなのではないかと思えた。ゆるい特殊なリアリティで読むのか。場がお腹に入っただけでこなかった」と疑問を語った。また、鈴木氏も「作品で一つの確実な小さな嘘を付いた時、その嘘は問われない。その中で誠実に語る作風と思って読んでいたが、最初の一つの嘘、大麻を育てるという嘘に、作家があまり固執していない。そこを大事にするはずなのだが。真実に連れて行ってくれるはずなのに、どこに連れて行ってくれるのかが、私には掴み切れなかった」と、疑問を呈した。

渡辺氏は「好きな作家。台詞が長くて理屈っぽいところが好き。どうやって上演するのか？と思うほど、いまどき、こな堅苦しい熟語は使わない、というような言葉をしゃべらせる。図書室の話（第16回最終候補『書庫』）や、おばあさんの人魚がオヤジみたいでおもしろい作品（第17回最終候補『人魚』）など、シュールな部分があり、また前回（第23回最終候補）の『漂着（i s l a n d）』でも演劇的な感覚を感じた。今回は映画的手法にタッチを変えようとして、台詞が短い。若い女の子同士の会話を書こうとして、過渡期にあるのかな。貧困の連鎖が描かれ、演劇をやりたい若い人が、風俗嬢のバイトをし、友人に大麻を作らせる。風俗嬢は彼氏に脅され、飼い犬のようにされる。貧困の連鎖の下、脳みそを取られたような状況にある若い人を書こうとしたのは、評価できる。ただ大麻が一つのモチーフでしかない。ヤクザが、大麻に気付いた老人の孫に瀕死の重傷を負わせるところは、今、東京で流行っている残酷な芝居に乗っかっているのではないかと心配に思った」と、評価しつつ指摘した。

植松は、救済ではなく”かさぶた“を書くほうがよいのでは

立ツ鳥会議の植松厚太郎は、初応募。東京大学を拠点とする学生劇団の劇団綺崎に入団。劇団同期とともに2010年に演劇ユニット立ツ鳥会議を結成。現在、大阪在住で、東京と大阪で活動している。

『午前3時59分』は、都内の夜行バスターミナルの管理事務所が舞台。バイトの桜子を中心に、正社員やバイト達の間人模様と、それぞれの事情が浮かび上がる。桜子は故郷で

家族の不和があり、友人の裏切りにも遭ったため、新しい人間関係を求めて上京。しかしやはり関係性に恵まれず、インコが唯一の友達になっている。6人の俳優が、24役を演じ分ける。

佐藤氏は「超・口語文体の作品。役割の不一致の手法は、岡田利規以降の演劇と思って読み始めたが、それとは異なる。描かれている世界の切り取り方が『いつの間にか』のト書きで役割を交替し合い、ストーリーは完結しないが、断片的にバックグラウンドが浮かび上がることに成功している」と評価。鈴江氏も「職場のモラルの低い人との付き合いが嫌な、いじめられている子。ろくでもない人々にいじめられる人生。それは積み重なった偶然ではなく、この人の必然だ、という書き方に説得力がある。いじめられたことへの復讐が、最後に新聞紙で頭をぱちんと叩くこと。弱い復讐で、何も変わらず救われない。読後感は暗いが、誰のことでもある、というメッセージ。不幸を並べて、無理に貧しいラストを作る戯曲は好きではないが、これは最後まで救いがなくていい」と、高く評価した。

鈴木氏は「ファミレスなどで仕事をしている時、周囲から聞こえてくる口調に似ていて、リアル。若い絶望をここまで書いた作品を見たことがない。最後の救いについては、救いを書こうとして、それが嘘を付かずにやれる範囲が、新聞で叩くことだったという意味で、誠実でよい。ただ、新聞紙もとってつけたような気はしたが。血が出ている傷ではなく、どう治ったのかを見せたほうがいいのでは。かさぶたでいいから。それが演劇の使命のような気がする」と、評価しつつ指摘した。

渡辺氏は「当たり前のことの繰り返しのような気がして、それでどうなんだ、というところがわからず、読み込めなかった。タイトルの『午前3時59分』というのは、私にとっては孤独な時間ではなく、むしろ新聞配達少年が来る時間で、『私一人じゃない』と思える時間。苦勞していないことが寂しいと書きたいのだろうか。若い頃の苦しみと、そうでない苦しみ。そのギャップで私が読み込めなかったのか」と疑問を呈した。

生田氏は「夜のバスターミナルが舞台なので、見知らぬ来客が行き交う展開かと思ったが、バスターミナルの管理事務所が舞台で、仕事をしない社員やバイトの話だった。来客は出てこないのか？ 過去の時間にフラッシュバックし、桜子の物語に収斂し、午前4時に向かっていくのかと思ったら、違っていた。ポリフォニックに散りばめられた要素が、4時に一斉に奏で始めるのかと思ったら、そうではなかった」と疑問を呈した。

半分の作品を語り終えたところで、13分ほど休憩が取られた。2時22分に論議を再開した。

村上は、重力に逆らって這い上がる美しい作品

夕暮れ社 弱男ユニットの村上慎太郎は、最終選考会初登場。

『ハイアガール』は、銭湯の煙突によじ上り、落下して死亡した女子高生の話を発端に、彼女の親友の女子高生や銭湯の人々、病院から逃げ出した女など、女子高生を巡る人々の

心の動きをリアルに描写した作品。

鈴江氏は「銭湯の煙突のてっぺんからおこちた少女の死を、どう乗り越えるか。シンプルに物語を絞り込み、『喪』の作業をどうやってやるのか、心理的解説付きで挑んでいるのが潔い。普通は知識を隠すのだが。そこをちゃんとできるのかの興味で読み進み、最後に（死んだ女子高生のバイト先の女性が）泣く。間の長さで説得力を作っているのがいい。×を付けたのは、煙突のてっぺんから落ちて死んだ子の死を乗り越えるなら、最後に煙突がなくなったら、いかんのではないか、と思ったから。1年後、魔法のようにいろんなことが解決している。銭湯がドイツの最新式ボイラー室に変わり、煙突を撤去したとか。お金がなかったのではないのか？ 死んだ女の子に彼氏と浮気された女性が、別の男性と結婚しておめでただとか。これはハッピーなのか？ 想定されているハッピーエンドとのずれを感じる。同じ風景を見ているのに、こちらの受け止め方が変わって成長する、がゴールではないのか？ 高い所に上ってどうするか、が話の中心なので、説得されなかった。そういう読み方ではないのか？」と、評価しながらも疑問を呈した。

鈴木氏は「読んでわからなかったが、解説を読んで、そういうことかとわかった。上演では、体を見せる、上るという作業を見せる。女子高生がぐるぐると駒のように回り続けることを、俳優がやらなければならない。気持ち悪くなるまで回る。俳優は大変。それでつながった。俳優の体を見せたい作家だったのだ、と。それが見たくて書いていらっしやる。それなら、芝居はおもしろそう。ただ、それならば、戯曲賞なので、ト書きを書くほうがいい。プロローグの前に『転がる人生だとしても』と書かれているが、これはサブタイトルなのだろうか？ ご覧になりたい演劇に対し、丁寧に書かれた方がいい」と指摘。

渡辺氏が「私は◎。泣けちゃった。大賞に、と思って来た。煙突は男根の象徴で、這い上がる女は、処女を奪われたうえに、愛されたわけでもないことに絶望し、自殺したのだ。そのことを親友にも言えず、事故に見せかけて自殺した女の話と思って読んだ。男女差別を含め、世の価値観から這い上がる、良いタイトル。男女差別のなくなる世の中を描く構造になっている。タイまで行って手術を受け、真実を言おうとする女性（注：亡くなった女子高生のバイト先の女性・幸子は、口のメカニズムが悪いという設定）は、自分が言うべきことを言えなかったために少女を救えなかった、と悩んで、ため込んでいる人。その人でないとわからない痛み。皆が這い上がっていく美しい作品だと思った。理由を言わずに自殺した少女も、痛々しく、感激した。重力に逆らって高い所に行こうとする、抑圧された状況が書けている。受け止められない人々が切ない。胸に響いた」と絶賛。生田氏も「僕は、この作品と田中作品の両方を大賞に推したい。響き合うところがある。少女の死を受容する人々が、何故突然自殺したのかの理由探しに行かないところがいい。彼女の死でしかない。私の死ではない。三人称の死。それでも何かぐっと飲み込んで、思いをストレートに吐き出さず、前のめりにフィジカルに吐き出すのが好き。進行するテンポ感に魅かれる」と絶賛した。

佐藤氏は「クレバーな作家。ただ、パフォーマンス的なことが、全部作家が設定した役

割に見えた。上ることを身体で行うなら、落ちるのはどうするのか？劇を作るために、煙突から落とさなきゃいけないが、パフォーマンスを設定させるためなら、作りものに見える。何故それを選ぶのか？　こういう世界に対し、フォーカスを引かないと書けない」と指摘した。

山崎は、戦争の認識が薄い現代の怖さを描いた

悪い芝居の山崎彬は第17回『嘘ツキ、号泣』で佳作を受賞している。最終選考会は6回目の登場。

『メロメロたち』は、東京と大阪を中心とした東西戦争が起き、分断された架空の日本が舞台。ゲリラ的にライブを行うバンド、メロメロ。ファンである学兵が誤ってヴォーカルを狙撃してしまったことから、バンドはばらばらになる。戦前と戦中、そして戦後の再会が描かれる。

渡辺氏は「ロックは反権力だった。反体制、反戦のはずなのに、この作品では右翼として出てくる。皮肉の皮肉。それが、わざと書かれているものだとすると、描かれている男女差別に吐き気はするが、それもわざと書いているのだろう。OMS戯曲賞の選考委員を受けた時から男性作家による女性差別の問題を主張してきた私に対する勝負だと思う。子供っぽいばかばかしさを利用して、今の世の中をパロディ化している。劇作に対する大きな考えがあることが見える作品」と、高く評価した。

生田氏も「ぼくもバンドマンを目指していた時期があり、日系三世のふりをして、戦っていた。この作品は、平和ボケのお花畑の日本人に対し、警鐘を鳴らす、といったアジではなく、作者の芸術家宣言として読んだ。単純にすべて0にしてしまうアナーキーさ。東京キッドブラザースを見てびっくりした感じに似ている。こんなもの、演劇じゃねえ！と言うこともでき、大賞には推さないが」と、評価した。

それを聞いて、渡辺氏と鈴木氏から「タイトルがいい。『メロメロ』と『×○×○』を掛けている」と評価の声が上がった。ただ、鈴木氏からは「『どう生きるか』ではなく『なぜ生きるか』こそが重要と言わなきゃ…』『静けさ、とはまた違う静けさ』などのト書きは、言葉のみが先行しているように感じ、引く」という言葉もあった。

佐藤氏は「僕のメモには『嫌い。でも、意地で○』と書いてある。あまえんじゃねえ、とも思うが、それを否定できるのか？　それくらい戦争が薄くなっている怖さがある。東京と大阪の戦争というリアリティのない世界。脳内で戦争を扱っている。パンドラの箱のよう。ポンとあけると楽に言えちゃう。でもそれを今、否定できるのか？　嫌いだ、否定できない。意地でも○を付ける」と、変化球(?)で評価した。

鈴江氏は「皆さんのを聞くと僕だけ素直に読んだような感じがする。作者なりの、まっとうな戦争を考える姿勢の表明。投票率の低い若者達の中で、今戦争が起きたらどうなるか、を想像して書いたのだと思う。逃げた時、追い詰められて死ぬだろう。そういうメッ

セージ。恥ずかしくて普段言えないけど、切羽詰まったら言える台詞の連続。パロディでもなく、作者の思う近未来のリアルな話。彼の想像に付き合うが、でも彼と友人にはなれないと思う。こういうことを書かないといけない若者の存在は貴重」と評価。渡辺氏は「私は案外、友達になれるかも」と語った。

ここで10分間の休憩。3時12分に論議を再開した。

田中は、個性的な構造の世界に迷いなく連れて行ってくれる

正直者の会の田中遊は、第21回『夜の素』で佳作を受賞している。最終選考会へは3回目の登場。『私と本屋の嘘』を応募。

読書サークルに所属する中年男性・善幸は、母の余命が残り半年であることを聞かされるが、それを母に告げられずにいる。そんな中、彼は一冊の本と出会う。小説の内容は、潰れかけた書店を立て直したい書店員達の物語。善幸は本の中と外を行き来する。消えゆく物（者）と、残される物（者）とのやりとりが展開される。

生田氏は「不思議な体験ができ、興奮した。劇世界を理解しようと構造を整理してみた。善幸が、道で声を掛けられた老人から赤い本を預かり、それを置き忘れて本屋に探しに行く話。そしてもう一つの、現実に見える世界、すなわち、余命宣告をされた母にそのことを伝えるかどうかの時間が、入れ子で進行している。また、その赤い本にも内部の時間と外部がある。クラインの壺（注：境界も表裏の区別も持たない曲面の一種）のような、個性的な構造。母の死と私の死。三人称の死から、一人称の死へと行き来する、冥府を巡る死の物語だ。死の受容のプロセスで冥府を巡る。ともに生きた人の死という、死の意味に到達して終わる。ラストシーンが胸に沁みた」と評価した。佐藤氏も「何度も読んだ。幻の廃墟のような本屋が魅力的。臨死体験から考えて、幻想の飛び方にリアリティがある」と評価。

鈴江氏は「そこにいる人達の動機がやさしい。死をみとる時、古来、呪術師は家族で団結するという充実した時間を用意してくれて、死にゆく者も大事にされた体験と思うことができる。小難しくなくて、やさしい話を聞いてね、と思っているような本。ただ最近のインフォームド・コンセントはあっさりしていて、家族が悩む前に、本人に余命を告知していたりする。設定としては古いのではないか。人情物を読んでいるみたいで、生々しくドキドキするものではなかった」と語った。

鈴木氏は「山崎さんの劇団名が『悪い芝居』で、田中さんは『正直者の会』。でも、正直者の会のロゴマークは、鼻の伸びたピノキオで、嘘つきを表している。どちらのセンスにピンとくるか。田中作品がこじやれているなど思うのは、ご自身がはっきりわかっていることだけ、責任を持って書いておられるところ。迷いなく連れて行ってもらえるのは、いい感じの村上春樹。意味のわからない世界に迷いなく連れて行ってくれる。なくなっていくもの、書籍や本屋、母親をイメージした時、不思議な本屋に行ってしまう感じに確信が

あって、ご自身に嘘を付かず、美しいと思う手法で書いておられる。戯曲としての完成度が高い」と、高く評価した。

渡辺氏は「田中さんは好きで、期待して途中まで読んだが、後半は、昔見たことがある。加藤直さんの『シュールリアリズム宣言』のほうがおもしろい」と語った。

この時点で、時間は3時28分。いよいよ最後の作品、上田誠の論議に移る。上田作品では、30分もの論議の時間を要した。

上田のコントはチェーホフか!?

ヨーロッパ企画の上田誠は、2017年、第61回岸田國士戯曲賞を受賞した話題作『来て見つかるべき新世界』を応募。最終選考会は6回目の登場だ。

通天閣を望む新世界のはずれにある串かつ屋が舞台。ドローンが出前をし、AI搭載の炊飯器が将棋や漫才もする世界。AIの波に翻弄される庶民の哀歓が描かれる。全編笑いのセンスに綾なされた作品。

渡辺氏は「怖い戯曲。近未来を諷刺しているのではなく、このヴァーチャルな世界を支持して書いているのが、怖い。『ブレードランナー』は、近未来を描きながら、現代社会を批判したが、この作品は、これでいいと思っている。作家は確信犯的にリベラルが多いと思うが、保守派の作家が出てきた驚きで○を付けた」と語る。

それに対し、生田氏は「僕は、作家がこの世界を肯定している、支持しているとは思わない。風俗を風俗としてゲーム感覚で遊んでいると思って読んだ。2045年問題（注：2045年に人工知能が人間の知能を超えと言われていた）の設定、ポストヒューマンと言われる中、アンドロイドは登場せず、ロボットが人間と会話している。『ブレードランナー』では、アンドロイドとヒューマンの対決が描かれ、根源的なアイデンティティ・クライシスが展開されたが、この作品では、人工知能が人間を越えても、あつけらかんとベタに受け止めている。ライトな感覚を楽しめるのかどうか、評価の分岐点だと思う」と語った。

佐藤氏は「風俗劇というジャンルの芝居として、よく書けている。テクノロジーも新世界の描き方も通俗的。それで書き出す芝居があっていい。引きこもっているオヤジがいて、人情劇で収めた。新聞のネタくらいの批評性を持っていて、否定できない。戯曲としては技術的にちゃんとしている」と評価。

鈴江氏も「上手。でも、半分読むと飽きちゃった。楽しませてくれるのだが、受け身で坐っていたら楽しめるものを、僕はあまり見たいと思わないので。わざと書かないものがあるってこそ感動だと思う。鑑賞行為も芸術だ、と、能動的に獲得するのが演劇と位置付けているので、○はギリギリ。敬意は払わなきゃ」と、微妙な評価。渡辺氏が「思想はリベラルですか」と問い掛けると、鈴江氏は「考えないで遊べるのは、保守的。動機の中に、AIが発達するのは恐ろしいことだとする、新聞のネタくらいの批評性があるおもしろが

り方。僕はそこがおもしろがれない。AIが人間を追い越した時の悲劇性。人類史が終わり絶滅する。それを引き受けて戯曲は存在する。引き受けずに遊ぶ意味は？」と問い掛けると、渡辺氏は「ほんとに肯定している。ロボットが老人の相手をした方がいいと、本気で思っている」と答える。鈴木氏は「肯定的とか、深く考えていない。東京03のコントは、1本のネタが30分で、1ミリくらいでコント、1ミリの違いで芝居になる（ボーダーな）内容だが、この作品も市井の人々の中にAIがやってきてしまったら、というコントとして、とても優秀。優秀に書けているコント。過不足がない」と評価。

さらに渡辺氏は「田舎に帰ると、一人で住んでいるおばあさんが通販で喋る人形を買っていたりする。毎日会話している。寂しいから買ったと言っていた。少子化で将来ロボットが介護する時代が来る。ほんとにそうだと、批判でなく、意図的に書いている。現実はこの1歩手前まで来ている」と語り、鈴木氏は「私は意図的ではないと思う」と語る。

佐藤氏が「コントとしてなら、ほめ過ぎだけど、チャーホフだと思う。『桜の園』は、滅び行くブルジョアジーを描いている、というより、人間をそのまま描いている。演劇が果たすべき役割だ」と語るが、鈴江氏が「(芝居が)長い」とコメント。議論が続く。ここで、劇中描かれている西成暴動についての質問がなされ、司会の小堀氏から説明があり、さらに「上田君は京都の人で、幻想の通天閣を描いた笑劇。現実の新世界とは違う」と付け加える。

さらに鈴木氏が「人が生き生きして、笑える」と評価。生田氏は「ここまで機械化が進むと、失業率が上がるだろう」と語ると、渡辺氏が「失業する前に人が減るだろう。介護をする人の数が少なくて、ロボットで埋めるしかない」と、論議が尽きない。

時間は4時3分。開始から3時間が経過。ここで10分の休憩を取り、再投票することになった。

再投票。なんと、上田・山崎が下がり、田中トップに

大賞に○、佳作に△を付けることになった。結果は、上田、植松、田中、村上、山崎に票が入った。

	生田	佐藤	鈴江	鈴木	渡辺
上田				○	
植松		△	○	△	
田中	○	○	△	△	
村上	△				○
山崎					△

なんと、最初の投票ではトップだった上田が、論議を経て5人中4位に落ちている。山崎も、3位から5位に落ちた。この段階では田中優勢。次いで植松。ただ、まだ決定には至らない。鈴木氏は△を二つ付けたが、「どちらか1本に、ということなら、田中さん」と語る。そうなると、田中がトップで、植松、村上が同数で2位となる。この5本に絞り、再論議が始まった。時間は4時18分。

渡辺氏から「読み方がこんなに違うなんて…」と、戸惑いの声上がる。佐藤氏も「迷う…」とコメント。

田中の入れ子構造は従来のものか？ 全く新しい手法か？

田中作品から語るようになった。渡辺氏は「私は無印。何度も見た芝居に思えちゃったから。すごく期待していたからだと思う」とコメント。鈴木氏は「柴幸さんの『ままと』に近い世界かもしれない。リフレインの手法は、『マームとジプシー』の手法も入っている」と語る。

鈴江氏は「生田さんは、冥府とおっしゃったが、迷宮に迷い込む旅を楽しむ、ということとは必要だと思う。ただ『不思議の国のアリス』は、おもしろいものを次々に出してくるが、それに比べると、おもしろくない。本屋が潰れる理由が、オーナーの賃上げのため、というのは、あまりおもしろくない。飛距離のある変な理由にするとか」と指摘。渡辺氏は「本屋をどうしたいのか？ 思い出・失われた過去のものや捉えているのか？」と問うと、鈴木氏が「確実にあったが、失われたもの、重要だったものが描かれている」と答える。佐藤氏は「本屋がなくなる理由についてだが、蝋燭が並んだ向こうに書棚があると、部屋が砂に埋もれるのなら、季節風の設定とかにしないと」と語る。

渡辺氏は「私の友人の本屋が赤字で、教科書売って赤字を埋めている。本屋の経営難を、切実な問題として捉えているのか、ファンタジーとして見るのか？」と疑問を呈する。鈴木氏は「ある意味、上田さんがAIの未来について深くお考えでないのと似ている」とコメント。渡辺氏は「ファンタジーとしても、思想はあるのか？ 上田さんが新世界を扱うように、本屋を扱っているのか？ 上田・田中作品、両方に引っかかる」とさらに疑問を呈する。

生田氏は「見たことのある入れ子だが、少し違う。現実の時間で、母への告知のことで悩んでいる善幸と、本の中の善幸。それが、あるところで『私』が園田（善幸の不倫相手）に替わるのには、びっくりした。既視感のある入れ子とは違う」と、手法の新しさを評価。

再び渡辺氏から「妻と、不倫関係にある女性の両方を出すのは、どういう役割によるもの？」と疑問が出され、今度は鈴江氏がコメント。「読書サークルのメンバーは、本への愛着がある人々（注：不倫相手の園田は、サークルのメンバー）。本が棚にないことは、『私』が満たされていないことを表現している。本好きの人の独特の思いを、葛藤の示し方として表している」。さらに鈴木氏が「田中さんをいいと思うのは、ご自身の美意識がはっきり

しておられるところ」と語る。

この後、母が末期癌である話から、『ハイアガール』の少女の死が自殺か、事故か？の論議に移り、再び田中戯曲に話が戻って、細部に渡って意見交換される。選考会の冒頭、選考委員から、○を付けなかった作品について、「自分が読み込めなかったのかもしれない」といった、謙虚な言葉が聞かれたのだが、とんでもない。全員がどれほど隅々まで丁寧に読み込み、深く考察して選考会に挑んでいるかが、熱っぽく伝わった。全員の記憶力と洞察力、熱意には感動する。

田中作品の再論議に34分を要し、次は植松作品の再論議に移る。時間は4時52分。

植松は現象を捉えているが作家の立ち位置は？

植松作品については、鈴江氏が「リアル」と語り、鈴木氏も賛同。ただ鈴木氏が「最後に（桜子のささやかな復讐として、新聞紙で）殴らせなくてもいいのでは？そのまま頑張っちゃえばいいのに。こんなにバカばっかか？という人ばかりが出てきて、この作家も自分が信じて、掴んでいることを貫いて書いておられるので、殴らせることで、かえってぶれるのでは？」と付け加える。

佐藤氏は「原因と結果、という観点で話すと、上田さんの作品は、観客を楽しませる、という作家の『原因』が見える。植松さんは、今の状態は書けているのだが、作家が書いている理由と作品とのバランスがよくない。今を描こうとする意志はよいのだが、何故今こうなのか、を考察してほしい。でないと、現象だけ書くことになる。作家の立ち位置がわからない。大賞には推せない。佳作はいいと思う」とコメント。

生田氏は「迷走している。何故ターミナルにしたのだろうか」と疑問を呈する。佐藤氏は「公共空間を作りたいからだと思う。文体は今の言葉。その会話体が持つ言語空間で、女の子の視点がある」と答えるが、生田氏が「それがぶれているのではないか。『トラウマの反対はトラウシだよ』という言語感覚などが」と語る。この瞬間、渡辺氏から「ぶれていないのは、山崎さん」の声が上がり、直後に鈴木氏からも「ぶれていないのは、上田さん」の声が上がる。続けて渡辺氏から「村上作品がダメなら、山崎さん」の声。論議の合間にも、自身の推したい作品を推すチャンスを掴んでおられる。なんとも情熱的な選考会だ。

続いて、上田作品の再論議に移る。

見たい作品と、やりたい作品。ますます混迷

上田作品を推す鈴木氏から「上田作品は、この戯曲賞ぼくないのだろうか？」の疑問。佐藤氏は「僕が○を付けない理由は、岸田戯曲賞をすでに受賞しているから、の1点。岸田戯曲賞とは別の視点の賞であることをはっきりと出す意味で。違う価値観を出さないと」

と語る。

鈴木氏は「ファルスとして、高いレベル。作家としての、対象に対する態度を問われると、トーンダウンするが。お客様を絶対楽しませることを、徹頭徹尾なさろうとしている所は、評価に値する」と推す。渡辺氏は「上田さん、山崎さん、ともに同じくらいのおもしろさで、山崎さんには、ぶち壊してやろうという確信犯のおもしろさを感じる。(演出を)やってみたくて思わせるのは、上田作品より山崎作品」と、山崎を推す。鈴木氏は「上田さんは、見に行きたい作品。やりたいのは、植松作品」と語る。渡辺氏は「私が演じたいのは、田辺作品。若い子達が、陰で残酷なことをやっている。客として見たいのは、村上作品」。見たい作品、演出家としてやりたい作品、女優として演じたい作品、として、すでに対象外になった作品も再浮上。選考はますます混迷する。候補作すべてについて、愛情深く接しておられることが伝わる。

二転三転四転五転…

「(選考が) 案外難しいな…」(鈴木氏) という言葉も聞かれ、10分間休憩を入れて、3回目の投票を行うことになった。時間は、5時10分。佐藤氏から「少し考えさせて」という要望が入るが、休憩と言いながらも、論議は続いている。

鈴木氏が「上田大賞で論破できる気がなくなってきた。ただ、このおもしろさは評価したい」と語る。渡辺氏は「(選考の) 戦略を考えると、山崎さんが○で、村上さんが△になる。しかし、本当に○にしたいのは村上さんで、山崎さんは△になる」と語る。佐藤氏は「困った。戦略で考えると、○を田中さんか山崎さんか…」。全員苦渋の様子。そこで渡辺氏が「好きな作品を正直に○にしましょう」と提案。

この、脳から汗が出そうな議論を経て、5時20分、3回目の投票の結果は次の通り。大賞が○、佳作が△だ。

	生田	佐藤	鈴木江	鈴木木	渡辺
上田		△		△	
植松			○	○	
田中	○	○	△		
村上	△				○
山崎					△

鈴木氏が動いた。上田を○から△に変え、また2回目の投票で植松、田中の2本に△を付けていたものを、植松1本に絞り、さらに植松を○に変えている。佐藤氏は、△を植松から上田に変えた。

この流れで行くと、大賞は田中か植松だ。なんと、山崎は最下位に落ちている。

ここで大賞を決める論議に入る。○の入っていない山崎を、論議の対象から外すことになった。すると、すかさず渡辺氏から「私は、村上作品が大賞にならないなら、山崎さんがおもしろいと思っている」の言葉があった。続いて、「田中さんを大賞に」「村上さんは佳作の可能性がある」「上田さんを佳作にする」などなど、次々に声上がり、混迷。司会から「まず大賞の議論をしましょう」の声が上がった。

渡辺氏が「私は山崎さん」とすぐに声上がる。

そこで、植松、山崎、田中の3作品から大賞を選ぶ議論となった。山崎復活。

「大賞の票を移動しますか？」と司会に問われ、生田氏、鈴木氏は「しません」と返答。佐藤氏は「植松作品は、佳作だと思う。大賞は田中さんか山崎さん」と答える。生田氏は「田中さんが大賞にならないのなら、佳作に推したいと思う」と語る。

渡辺氏は「村上作品はおもしろいので、何かの形で評価したい」と語る。佐藤氏は「上田さんを落とす理由がない。落とす理由が僕の中であるとすれば、岸田戯曲賞をすでに受賞している、という点だけ」と語り、渡辺氏は「私には村上さんを落とす理由がない。魂を掴まれた。上田さんは、よく書いていると思う」と語る。生田氏は「なんちゃってブレードランナーで、僕は笑えない」。さらに佐藤氏が「上田さんは、最初の段階で○を4つも取っている」。鈴木氏は「田中さんには×が一つも付いていなかった」。佐藤氏は「ほんとは、田中さんか上田さんの戦いだっただけだ」。次々に声上がる。ここで鈴木氏から「最初の投票を点数化するとすれば、○を2点、△を1点で考えると、田中さんと上田さんが8点でトップ。山崎さんは7点。頂上に残るのは、上田・田中・山崎さんのはず」と、数字から分析。上田復活。秒単位で状況が変わる。

鈴木氏は「美意識に忠実、誠実に粘り強く書いているかどうかで評価した。気持ちが動く可能性が高いのは植松さん。将来的に」。

渡辺氏は「まとまっていることより、破綻があっても動機や書きたいものを、不器用でも書いている作品を評価したい。上田さんは達者。でも、破綻があっても動機の強い人を伸ばしていきたい。自分のやりたいこと、社会に一石を投じる人に」。鈴木氏は「それは、OMS戯曲賞としての気持ち？」と問うと、渡辺氏は「私の気持ち」と語る。

佐藤氏は「僕は（山崎作品を強く）推せない。同じことを繰り返していても、芝居はダメなんじゃないか？ ハードルを高くしないと」と語る。

ここで渡辺氏から「上田さん大賞、田中さんが佳作か？」という声上がる。

しかし、田中の第21回佳作受賞作『夜の素』が大変おもしろかったという声上がり始め、それと比較してどうか？という話となる。生田氏は「僕は今回の作品がおもしろい」と推す。

上田作品について渡辺氏から「社会の風潮として、東京の戯曲賞も達者でまとまりのある作品が評価されている。上田作品が受賞するのは、現代的かもしれない」という声上がるが、佐藤氏が「違う意味合いも生まれる」と語り、議論は続く。

渡辺氏は「上田作品がチェーホフだという意見があったが、私もしチェーホフの時代に生きていたら、チェーホフへの授賞に反対したかもしれない。本当に格差をわかっているのか。地方の貧しい人々を本当に書いているのか。チェーホフの『三人姉妹』では、ナターシャの方が正義だと思う」と、チェーホフ談義が続く。

ここで生田氏が「上田、田中、山崎作品からの三択か？」と確認があり、この3人で投票することになり、渡辺氏が「村上作品が無理なら、考える」の声。

さらに、植松作品に授賞しない理由があるとすれば何か？の議論となり、生田氏が「桜子の物語か、群集劇なのかが、うまくフォーカスが合わないまま。いい加減なアルバイトの姿が、今を映しているとは思えなかった」と語ると、鈴江氏が「僕は、いると思う」と語る。

鈴木氏は「桜子が、同じ閉じた人としか出会えないのは、あまりに辛い。でも、期待という意味では、植松さんに期待する。次回作は一番読みたい作家。私は植松さん、岡部さん、村上さんの次回作を読みたい」と語る。司会から「そういう人は、これまで佳作だった」と言う声があった。

話し合いでは決まらず、ここで4回目の投票をすることになった。大賞として、上田、田中、山崎作品から、○を一つ付けることになった。「まさか、こんな風になるとは…」という沈痛な声上がる。

山崎、大外から追い込んだ！

山崎に佐藤氏・鈴江氏・渡辺氏、上田に鈴木氏、田中に生田氏という結果が出た。ここで生田氏から「田中さんから変えてもいいのは山崎さん」という声上がる。となると、山崎が大賞だ。しかし鈴木氏が「議論の流れが、今一つ納得できない。山崎作品は、2回目と3回目の投票で△が一つ付いてただけで、落ちそうになっていたのでは」と指摘。鈴江氏が「僕は植松作品の大賞の線がなくなるなら、成熟は感じないが山崎作品」と語る。

ここで佐藤氏から「多数決で異存ありません」の声があり、山崎が大賞に決定した。5時59分。ここで佳作の投票に移る。上田、植松、田中、村上から選ぶことになった。

植松に鈴江氏と鈴木氏、村上に生田氏と渡辺氏、田中に佐藤氏。植松と村上が同票だ。ここで佐藤氏から「田中さんから植松さんに変える」との声があり、植松作品に決定した。6時1分、選考会は終了した。

もっと広い世界へ！

授賞式では、東京で外部公演演出中の山崎彬のメッセージが代理の植田順平によって代読された。「関西で演劇を始めた人達にとって、大きな目標・夢である賞の受賞を心から嬉しく思います。出演者やスタッフが決まって、初めて書くことができる。劇団員がたくさんのイメージをくれました。演劇は何でも詰め込める、おもしろい表現。一人では作れない。選考委員の方々も、これまでたくさんの言葉をありがとうございました」。東京で演劇を始め、現在、大阪在住の植松厚太郎からも、大阪での舞台を支援してくれたスタッフへの感謝の言葉があった。

公開選評会では、山崎作品について、次のようなコメントがあった。「この世のすべてに0を掛けてなしにする、アナーキーなメッセージに圧倒された。アジテーションではなく、表現する者は、いつも戦場にいるつもりで命を燃やすという、芸術家宣言に思えた。デッサンより色彩。圧倒的色彩の作品。僕は賞に推さないつもりだった。演劇じゃねえ！というのが、まっとうな向かい方だと思う。ひょんな…大賞授賞となった」（生田氏）。「アジアの作家達の苦闘に比べると、日本の戯曲は低迷している。何をやりたい、どう人と関わりたいのか、という意味で遅れている。『メロメロたち』には、戦争という言葉が使われているが、戦争は日本人だけが使う言葉ではない。メタファで使うなら慎重に。広い世界と出会ってほしい。そろそろ抜け出してほしい。いつまでこんなことをやっているんだ。自分を大切にしながら、まっとうに生きてほしい。今回読んだ作品の中で、作家の立ち位置がわからなかった作品の一つ」（佐藤氏）。「一番に推した作品ではない。二転三転考えた結果。よかった点は、日本の芸術の中で戦争を想像し、自分ならどう思うか、という思考実験をしているところ。共感はないが」（鈴江氏）。「評価した点は、あがいているところ。全員にいい役を書きたい。試行錯誤し、傷付き、のたうちまわっている。私は村上さんの『ハイアガール』に感動し、大賞にしたかった。2番目が山崎さんと上田さん。同じくらいに田中さんもおもしろい。山崎さんを推したのは、自分の仲間のために書いてほしいから。絶望し、破綻だらけで子供っぽい。思っていることをロックとして歌い上げたいという悲鳴に説得力があった」（渡辺氏）。

植松作品については「感情を動かしてくれた。ろくでもない人達ばかりにいじめられるバイトの女性がいて、誰も救えない。救われない。それが現代の若者だと観察している。僕は賞に推したが、支持されなかった。私の生活の経験と感覚で、若者がどんな交友関係を持っているかを肌で知っていて、膨らませて読んだのかな。他の人はそうではなかった。そこまで引張るほど描写していないのかな」（鈴江氏）。「若い人が絶望していることを訴え掛けてくる。現実模写でなく、何故、どんな理由でそうなるのか、原因は何なのかを書かないと。この作家は何を前提として書いているのか。人が入れ替わるのは、演劇的仕掛けとして、新しい演劇の書き方に取り組んでいる」（佐藤氏）。

最後に司会の小堀純氏から「OMS戯曲賞は、来年25回になります。岸田戯曲賞とOMS戯曲賞の違いは、OMSは公募であること。応募して頂かないと成立しない。まずは上演して出して頂く。それを支える劇団の人、観客、劇場の人の力があっての賞。一度受賞しても、応募して頂ける賞です」という言葉があった。

毎回議論は白熱するが、今回は特に1本に絞り込むのに苦労した選考会だった。最初の投票の結果を見た限り、ここまで苦労されるとは思わなかった。理由は、全員が強く推したい1作品があり、それが見事にばらばらだったことだろう。最後は多数決で決まった。ただし、今後の創作への期待と、大きな叱咤激励付きで。結果を前向きに受け止め、ぜひ未来に生かしてほしいと願う。

(文中一部敬称略)